

# 序

『飛鳥・藤原宮出土墨書土器集成Ⅰ』を、奈良文化財研究所史料第96冊として刊行します。

飛鳥藤原地域は日本古代国家の搖籃の地であり、文書行政が本格的に始まった地でもあります。官衙や寺院などの遺跡から、墨書や刻書した土器が出土します。墨書・刻書土器の出現は、木簡よりやや遅れ、仏教伝来を契機とした文字利用の定着の一環とみられます。記された文字には習書や落書なども含みますが、遺跡の性質を示すものもあり、木簡とならぶ重要な価値をもっています。

奈良文化財研究所が飛鳥藤原地域で最初に発掘調査を実施したのは、1956・57年度の飛鳥寺の調査です。以後70年近くの調査で、計724点の墨書土器が出土しています。出現期の墨書土器を含んでいるという点で限りない価値を有していると言うことができるでしょう。

本書では、藤原宮と藤原京から出土した墨書土器359点を報告します。既に発掘調査報告に発表したものも含んでいますが、その情報量は十分ではありませんでした。今回は釈文と写真に、主な土器の実測図を添えて公表します。

掲載した資料は、溝から出土した資料が多くを占めています。内容は多岐にわたりますが、木簡の記載内容から藤原宮の造営が天武朝末年には本格化していたことが知られた宮造営用の運河出土土器や、宮東辺の官衙に関わるとみられる東面外濠出土土器などの内容を、具体的に示すことができたことは重要なことと考えています。

藤原宮と藤原京研究の史料として、本書を『藤原宮木簡』、『飛鳥藤原京木簡』とともに御活用いただければ幸いです。

2025年3月

奈良文化財研究所  
所長 本中 真